大学院：学校教育専攻，生涯教育特論

アンケート結果にみる授業の成果と課題

学校教育講座・山田　誠

１．授業の概要

（１）受講者

本授業「生涯教育特論」は、教育学研究科学校教育専攻・学校教育専修の授業科目（教育社会学・教育経営分野）であり、開講学期は１年次前学期である。

今年度の受講者数は、現職教員１名、学部からの進学者１名の、計２名であった。

（２）授業の目的・目標

本授業の目的は、生涯学習の支援方策や生涯学習社会構築のための諸課題についての考察を通して、生涯学習・生涯教育の意義及びその理論と実践に関する理解を深めることである。到達目標は、①生涯学習・生涯教育に関する基本的な諸概念を、具体的な問題の検討を通して理解できる、②取り上げた問題について分析・考察し、その解決策を探り、その成果を論理的にまとめることができる、である。

（３）授業の内容と改善への取り組み

受講者における生涯学習・生涯教育に関するこれまでの学習経験の状況を踏まえ、まず、生涯学習のコンセプトや社会的背景等、基礎的な内容について、ディスカッションを交えながら考察していくことから始めた。その上で、テキストを手がかりにしつつ、具体的なテーマを取り上げ、前半は主に授業者が主導するかたちで、後半は受講者による発表と討議を中心に展開した。取り上げたテーマは、生涯学習社会の理念と構想、生涯学習社会における学校、生涯学習成果の評価と認証、等である。

なお、今学期は、通常の授業における理論的な考察に加え、実践や現場に関する学習をも取り入れるべく、社会教育施設の視察を行うことにした。この試みにより、学校とはまた違った分野の現場に触れ、ノンフォーマル・エデュケーションの特質についての理解が深められるとともに、この体験が、例えば学社連携・協働等に関する考察や、さらには今後の実践に活かされることを期待した。

２．授業評価の方法

最終回の授業時に、受講者による授業評価アンケートを実施した。アンケートは、４段階評価形式の質問が７項目と自由記述形式の質問が１項目である。

３．アンケートの結果

【授業の内容に関する質問】

1-1.〔関心・興味〕この授業で取り上げられた事柄について、関心・興味がわいた。

４．そう思う：１名
３．まあそう思う：１名
２．あまりそう思わない：０名
１．そう思わない：０名

【授業担当者の授業方法に関する質問】

2-1.〔わかりやすさ〕教員の説明の仕方は分かりやすかった。

４．そう思う：２名
３．まあそう思う：０名
２．あまりそう思わない：０名
１．そう思わない：０名

2-2.〔授業方法〕社会教育施設への実地視察を取り入れたことは効果的だった。

４．そう思う：１名
３．まあそう思う：１名
２．あまりそう思わない：０名
１．そう思わない：０名

【あなた自身に関する質問】

3-1.〔あなたの態度〕あなたは、この授業に積極的に取り組みましたか。

４．そう思う：０名
３．まあそう思う：２名
２．あまりそう思わない：０名
１．そう思わない：０名

【授業全体に関する質問】

4-1.〔得るものがあったか〕この授業により、考えが培われたり、得るところがありましたか。

４．そう思う：１名

３．まあそう思う：１名
２．あまりそう思わない：０名
１．そう思わない：０名

4-2.〔目的・目標達成度〕この授業の目的・目標は達成された。
４．そう思う：０名
３．まあそう思う：２名
２．あまりそう思わない：０名
１．そう思わない：０名

4-3.〔満足度〕この授業は全体として満足のいくものだった。
４．そう思う：０名
３．まあそう思う：２名
２．あまりそう思わない：０名
１．そう思わない：０名

【自由記述】
授業で学ぶことができたこと、よかったこと、こう改善するとよいという指摘など、自由に記述してください。

記述欄を広めにしたこともあり、かなり長文の回答を得られた。まず、授業内容全般についての記述から、その一部を取り上げてみたい。各々が自らの見解を加えつつ、授業内容を振り返ってくれている。

・「生涯学習社会の理念や学校教育との関わりといった基礎的な部分を押さえながら、生涯学習という理念に対して社会がどうあろうとするのか、学歴社会と対比しながら広く学ぶことができた。また、自分が担当した生涯学習成果の評価では、正直混乱する部分が多かった。“評価”に関してはどの様な分野でも多くの議論がなされていると思う。もう少し違う文献にもふれながら、生涯学習での自己評価、他者評価について頭の中を整理してみたい（特に最近よく聞くポートフォリオ評価など）。」

・「授業を受講させていただき学んだことは、まずなぜ今生涯学習が求められているかということです。高度経済成長期や社会が成熟していない時期においては、必然的に学校教育の占める比重が大きく、いわゆる学歴を一つの価値とした社会が構成されることが必然であったのかもしれない。しかし、社会が成熟し経済が停滞してきた現代では、価値の多様化や個性化によって学校教育だけではまかなえない社会になってきたために、社会教育を代表とするノンフォーマルな教育や家庭教育を代表とするインフォーマルな教育の重要性が増してきた。また、長寿化や高齢化に伴い、時間的・経済的ゆとりに伴い、生き甲斐のある充実した人生を求める要望が強まってきたことも要因であるということである。

次に、生涯学習社会に向けての学校の位置づけや意義についてである。今までは学校教育の占める比重が高かったが、生涯学習社会では、社会教育・家庭教育・学校教育の３つがバランスよく機能し、お互いの弱点を補いあえるような関係が大切であるということである。したがって、学校教育に身を置いている我々は、生涯学習の大切さを生徒に伝えることと、生涯にわたって学びつづけることができる基盤づくりも求められていることを、しっかりと認識し教育をしていく必要がある。

さらに、生涯学習社会に向けての課題等もいくつか知ることができた。インターネットの著しい発達により情報化社会となっているが、依然として社会教育での学びの情報は意欲的な人を除いて入って来にくい状況で、人とのネットワークによる情報の方が勝っているように思った。また、社会教育での予算や人的不足についても、深刻な状況であることが感じ取れた。何事をするにしても、アイデアだけでは限界があるので、経済的な支援がしっかりと求められるはずである。最後に、評価の難しさである。実際学校教育においても評価においてはまだまだ課題が多く残されている。評価の必要のない趣味のような学びであっても、技術が上がるにしたがって他者評価を求めるのは仕方がないのかもしれない。社会教育ではもっと多様な学びがあるため、その学びをどのように評価し社会の中に取り入れていくかは、まだまだ課題が多く、すべてについては無理ではないかと感じた。」

・「前期の間、ありがとうございました。もともと関心のあった分野ではありましたが、今回の授業を通してその関心が広がったように思います。」

・「一つ要望としては、教員である自分が生涯学習社会にどのように関わっていくことがいいのか、何が求められているかについてより具体的な教示がいただければ自分としてはありがたかったと思いました。し

かし、全体を通して暖かみのある授業で和やかに時間を過ごすことができ勉強になりました。ありがとうございました。」

次に、今学期取り入れた２回の社会教育施設（２つの博物館）の視察については、「社会教育施設の現状（利用者の様子や職員の工夫、改善点など）を」、「実際に観て、肌で感じること」のできる「新鮮」で「有意義」な経験になったこと、「博物館は、理科教員である自分にとっては利用価値のある展示で、機会があれば是非授業にも取り入れてみたい」という抱負、また、生涯学習社会における学びの場としての施設の利用拡大のためには、「他機関との連携」や「利用形態」等、今後さらに「取り組みの改善」が求められていることを認識しえたことなどの記述が、それぞれの回答者から寄せられている。

４．考察と課題

アンケート結果は、各質問項目について、概ね肯定的な回答となっており、否定的な回答は見られなかった。しかし、「まあそう思う」という回答が多く、さらに改善が必要な点が多々あると考える。

例えば、社会教育施設の視察が効果的であったか尋ねた項目について、「まあそう思う」を選択した回答者の自由記述には、視察の成果とともに、「職員の人に質問する機会をもて」なかったこと、「視察前に自分でどのような視点をもって視察するかなど、課題意識をもって取り組むべきだったと反省している」ことが記されている。

今回の視察に関しては、視察先は候補の中から受講者と相談して確定することにし、少人数でもあり、一入館者として日常ありのままの実態を知るため、今回は訪問先との事前打ち合わせ等はあえて行わなかった。また、事情により実施日程も結果的には授業期間中にその都度決定することになった。そのこともあって、スケジュール的に、実施前に視察に関する時間をあまりとれなかった。実施後は振り返りのディスカッションを行ったが、社会教育施設が「普段なかなか足を運ぶ機会がない場所」（回答者の自由記述）であり、予備知識も十分とはいえない受講者にとっては、予め明確な視点をもつためにも、視察への準備段階を重視し、また視察レポート作成の指示なども必要であったように思われる。授業における実地視察の組み込み方については、実施回数や日程の確保、視察対象の選定等、なお検討が必要である。

さらに、自由記述の中にあった、「教員である自分が生涯学習社会にどのように関わっていくことがいいのか、何が求められているかについてより具体的な教示が」欲しかったという要望にも、注目せねばならない。一般論としてではなく、受講者自身、一人の教員として、生涯学習社会をめぐって実際何を自らの課題とし、どう取り組むべきかについての具体的示唆を求めておられるのだと受け止めた。大変有り難いことであると同時に、本授業にとっての大きな課題を指摘されていると思う。自分自身、何に取り組むべきか、言わば、一人ひとりにとっての「真のニーズ」、「真の課題」の探究に、授業を通してどれだけ貢献することができるか。受講者との対話を大切にし、受講者から学び、ともに問題意識を深めること、授業内容と受講者自身の自らへの振り返りとを結ぶことのできる配慮等々について、決して簡単なことではないけれども、今後も取り組んでいきたい。